項目 （担当）	重点目標	具体的方策	評価結果と課題
国語科	① 国語の基本的な学力の育成と定着 ② 生きる力としての読解力と文章表現力の養成	・毎週の小テストと課題により、家庭学習の習慣、基礎的な学力を定着させる。 ・教材を精選し、文章の表現の特色や読解の方略を示すことで、表現等に注意させながら、読解させる。 ・構成や要約文作成の段階で、グループディスカッションや、文章記述の時間をつくることで、ものごとを多角的な視点でとらえさせ、論理的な文章を書く能力を身につけさせる。	・ 週末課題や小テストの勉強に丁寧に取り組むよう指導をした。多数の生徒は良くできているが、できていない生徒が一部いるため、個別に指導していきたい。 ・ 記述問題が苦手な生徒が多いため、解答の根拠を本文から抜き出す練習からはじめ、少しずつ記述問題に慣らしていきたい。 ・ 要約文を作成する活動や、グループディスカッションをする機会を設け、自らの考えを深めることができるよう努めた。
地歴公民科	① 生徒が地理･歴史･公民の学習内容に対して主体的・対話的に学習する態度の育成	・生徒が主体的･対話的に学習を進める形を作る。そのために、バズ学習やワールドカフェ、パワーポイントの活用など、様々な学習形態について研究をするとともに、場面に合わせて効果的に実践する。	・ＩＣＴ機器やデジタル教材を活用して、生徒の興味関心をひくことで、主体的に授業に取り組めるように工夫した。しかし、考査や模試の結果では知識や基本事項の定着には課題が残るため、探究的な学習と並行した指導を検討していきたい。 ・ 論述課題でルーブリックを提示するなど、振り返りシートを用いて、生徒が適切に主体的・対話的に学習を進めることができた。 ・ 教員数が不足した状態で新年度がスタートしたため、場面に応じた学習形態の研究など教材研究は不十分な１年となった。
数学科	① 数学の基本的な学力の育成と定着 ② 学習指導要領に基づくカリキュラムと評価法の研究	・基礎学力定着のための習熟度別授業や内容の精選を行う。 ・課題と連動した小テストを実施する。 ・授業を通して、カリキュラムに対し、３学年連続した有効な学習指導法・評価法等を検討する。	・授業において多く発問をし、生徒に考えさせる機会を多く作った。また、課題と連動した小テストの実施により、生徒が授業や課題に対して積極的に取り組むことができた。 ・小テストや定期考査の結果から生徒の理解度を把握し、基本的事項の定着の確認ができた。 ・ プレゼンテーションソフトやデジタル教科書を使用して、板書の改善を図り、内容の理解に時間を割くことができた。 ・課題学習の内容、評価法については更なる研究が必要である
理科	① 身近な自然現象に対して目を向けさせ、自主的に実験・観察を通して、科学的に問題解決する態度の育成	・授業等で生徒自身が発見したさまざまな自然現象を取り上げる。 ・実験・観察の基本的操作を身につけさせる。	・ テーマに沿った実験・観察を通して現象を深く考えさせることができた。また、レポート作成にあたっては疑問点を班毎に話し合い、内容を深めることができた。 ・ 授業・実験を行う中で理科全般に対する興味・関心を深めることができた。
保健体育科	① 授業規律、時間厳守の徹底 ② 主体的・意欲的に取り組む授業の実践 ③ 安全面の配慮	・始業前集合を徹底する。 ・個々の能力や技量に応じたグループ分けや、練習計画を作成する。 ・課題学習をさらに充実させる。 ・ルール、マナーを徹底する。	・ 体育の授業では、体育委員を中心に、主体的・意欲的に取り組むことができた。 ・ 保健の授業では、グループディスカッションをする機会を設け、自らの考えを深めることができるよう努めた。
芸術科	① 生徒が自分の表現特性を自覚し、発想を持ち、試行錯誤の中から表現方法を模索して制作を進めるための指導方法の工夫（“学び”の工夫） ② 科目間の系統性、関連性、段階性を重視した授業内容の工夫	・アイデアスケッチや文章等の、造形活動の生成過程や内面を示す物の含まれた、ポートフォリオの作成と授業での活用の工夫を行う。 ・板書の工夫（授業のポイント、過程、到達点等を示すものを常に提示）を行う。 ・一斉指導時の効果的な発問を実践する。 ・鑑賞学習の充実をはかる。 ・校内、校外の展示と発表の工夫を行う。 ・制作過程を重視した評価の工夫を行う。 ・生徒との対話、記録物から、個々の良い部分（感性）を引き出し、より意識的、計画的な表現に導き出す工夫を行う。 ・教科書を活用した授業展開を実践する。 ・各課題のポイント（造形要素）の確認、毎時の目標の明確化をめざす。 ・ 科目間、学年間の情報交換と有機的連携、教科会の活用をめざす。	・ 課題の内容について生徒自身がそれぞれの視点で考察を深め、その作品で何を表現したいかを見つける手助けになるよう、アイデアスケッチの充実や、制作後の講評会で制作後振り返りが出来るよう努めた。 ・ 美術館での鑑賞学習を実施し鑑賞した作品について、様々な感じ方の違いや共感する部分を実感することが出来た。 ・ ＪＡ愛知北との連携活動を通じて授業の中で生徒が制作した作品が実際に社会の中で生かされて、創作活動と社会との繋がりを体感することが出来た。

項目 (担当)	重点目標	具体的方策	評価結果と課題
英語科	① 生徒個人の学力に応じた授業の実践 ② ４技能５領域を意識した授業の実践	・ワークシート、小テスト、課題を活用する。また内容によってはICTを積極的に活用する。 ・英語を用いて自分の意見を発表することや、相手とのやり取りや即興性を意識した言語活動を取り入れる。 ・パフォーマンステストを充実させ、ルーブリックによる明確な評価をする。	・独自のワークシートを用いたり、TEAMSをはじめとしたICTを活用するなど、生徒の理解を補助する様々な工夫をすることができた。また、生徒用タブレットを使ったオンライン小テストなど新たな取り組みを通して、生徒の基礎学力向上に努めた。 ・１・２年生を中心に年３回のSpeakingテスト・年５回のWritingテストを実施することができた。 ・９月に本校で行われた「あいちスーパーイングリッシュ授業研修」を通して外部から多くのことを学び、授業改善に活かすことができた。
家庭科	① 新学習指導要領に基づく評価方法の研究 ② 次年度からの２年生のカリキュラム変更に伴う授業内容の継続研究 ③ 総合学科における「家庭科」科目の指導法の研究	・新学習指導要領の実施に向けて、より良い新教育課程の評価方法を検討する。 ・２年生での「家庭基礎」、「フードデザイン」の学習を踏まえ、３年生の「フードデザイン」「保育原理」などの各分野のより応用的な知識と技術を習得させ、主体的に行動する力を育てる授業内容や授業方法を検討する。 ・２年生から選択科目「服飾手芸／フードデザイン」４単位が始まり、特に「フードデザイン」は、元々選択科目としてある３年生「フードデザイン」につながる科目となるため、２年間分の授業内容を具体的検討していく。	・保育科目で外部での実習を再開し、紙芝居作りやエプロンシアター、かるた作りなど、幼児教室へ参加するための必要な知識、主体的に行動する力や創造力を養うように授業を計画し、生徒が幼児教室の企画・運営ができるようにさせた。 ・家庭科食物調理検定３級・２級の取得に向けて、繰り返し練習をし、より良い作品になるよう、生徒に考えさせた。 ・今年度の生徒の現状を踏まえ、次年度からの新学習指導要領の評価基準の検討を継続して行う。
情報科	① 最新の情報技術の科学的な理解 ② 情報モラルの育成と個人情報保護の徹底	・情報技術、問題解決学習、アルゴリズム、プログラミングについての指導方法の研究を行い、具体的事例を提示しながら授業を展開する。 ・インターネットを利用したサービス、ソーシャルメディアにおける利点や問題点を具体的に提示し解説する。	・プログラミングの学習をはじめとして、情報活用能力の実践を意識した取り組みを授業に取り入れることができた。 ・情報モラルについては、事例研究をはじめ自分事としてとらえられるような授業展開を意識して実施できた。しかし、スマートフォンをはじめとした実際の生活の中でのトラブルが発生しているため、今後も生徒一人一人の問題として授業のみならず指導の工夫が必要。
工業科	① 製図系科目について、基礎学力の育成 ② 工業デザイン系科目について、基礎学力の育成	・立体物を理解するための造形的ものの見方を養い、物作りのための図面作成、教科書を土台とした基礎基本の指導を徹底する。 ・色彩や構成についての美的原理について、感覚だけでなく科学的な観点からも学びを深める授業展開を目指し、教材を工夫、精選する。 ・スケッチブック・レポート等を活用し、構想を練る段階での発想を豊かにする指導を心がけるとともに、作品のコンセプトを生徒に自覚させるため、制作過程で思考を深められる手立てを工夫する。	・製図系授業は、検定受験を目標として学習させることで、立体構造の理解力や、図面の作成能力を向上させることが出来た。今後の工業デザイン学習へのステップとしていきたい。 ・教科書を土台としながらも、スケッチや制作レポートを課すことで、発想の過程や制作後の思考を記録させ、自己の言動の変遷を客観的に捉えさせ、次の制作を計画的かつ創造的に行うための基礎とすることが出来た。
商業科	① 各系列に即した系統的・段階的な学習内容の研究 ② 魅力ある学校設定科目の研究	・各系列においての科目指導内容の選定と教材研究を実施し、教材開発をおこなう。 ・資格取得や作品制作・外部講師の活用・高大連携の授業など生徒に様々な経験をさせ、コミュニケーション能力の育成を図る。	・簿記系列の授業、情報系列の授業ともに、生徒に基礎・基本の知識を習得させることを意識して指導を行った。また、授業の工夫も徹底的に行った。その結果、生徒に興味や関心を持たせることができた。さらに、次年度に商業科の上級・応用講座を受講したい生徒も増え、商業科全体の講座数も増やすことができた。 ・岩倉市の行事が行われ、ポスター制作の依頼に応募することができた。また、今年度から江南警察署からのポスター制作の依頼を受け、江南警察署より好評を得ることができた。さらに、その他コンクールなどへの参加も行い、５作品入賞することができた。そして、校内での掲示も積極的に行うことができた ・岩倉市との地域連携プロジェクトを推進している。本年度は、打ち合わせ・提案のみであったが、次年度以降の取り組みの準備を行った。

項目 (担当)	重点目標	具体的方策	評価結果と課題
第１学年	① 基本的生活習慣と規範意識の確立 ② 生徒の進路観をはぐくみ、進路調べやその達成に向けた学習を充実させる。 ③ クラス活動、また学年活動を充実させて集団意識を高める。	・時間、ルール、マナーを守るとともに、自ら挨拶、清掃しようとする意識を育む。多様な考え方や文化を尊重できるような働きかけをしていく。 ・担任面談や学年ガイダンスの充実、また進路講話や模試、産業社会と人間を活用して、進路について考える機会を増やす。学習や資格取得に向けた動機付けを図る。 ・グループワークや学年での活動を多く実施して、積極的に意見を話す態度や他者の意見を聞く姿勢を育む。	・「生活と学習の記録」の生徒のコメントなどから、面談のきっかけをつかむことに繋がることができたため、次年度以降も継続していきたい。 ・多様な進路志望を持つ生徒たちに対し、「産業社会と人間」や学年LTを通じ、教員だけではなく、学校外の社会人の話をきかせることにより、進路観の醸成に努めた。課題としては、校外学習での行き先を検討する必要がある。また、進路実現のためにも、資格取得に向けて働きかけたが、もっと早い時期から意識させたかった。 ・グループワーク集団活動を導入し、協同性や学校への帰属意識を涵養することに努めた一方、特性上、集団になじむことが困難な生徒への手立てを工夫する必要があると感じた。
第２学年	① 選択科目の専門性を高めることと、「総合的な知」を高める学習をする。 ② 基本的生活習慣と中心学年としての規範意識の確立 ③ クラス活動、また学年活動を充実させて集団意識を高める。	・生徒の進路希望や選択科目を把握し、個々が引き上げたい専門科目については教科の枠を越えて、担任を中心に声掛けやアドバイスをしていく。そのために学年会などを活用して、生徒の授業の様子について、情報共有を活発に行う。また、「総合的な知」をテーマとして、選択科目のみならず１つ１つの授業で得られる知識を高めるように指導していく。 ・中心学年として、時間、ルール、マナーを守るとともに、自ら挨拶、清掃しようとする意識を育む。多様な考え方や文化を尊重できるような働きかけをしていく。 ・グループワークや学年での活動を多く実施して、積極的に意見を話す態度や他者の意見を聞く姿勢を育む。	・３年次の科目選択については、個々の生徒の進路状況を各担任がしっかりと把握し無事に終えることができた。また生徒は夏休みを中心に、学校調べや就職に向けての自己分析ができたので、徐々にではあるが進路観が深まってきており、学びへの意識も良い方向へ変わってきていると考えている。 ・学年の中でも、ルールやマナーをしっかりと守っているグループと規範意識が薄い生徒のグループ間で軋轢があり、学年の教員が話を聞いたり指導したりする場面が今年度は多かった。次年度に向け、全体への声掛けの仕方などを工夫していくことと、教員の粘り強い指導の姿勢が必要である。 ・総合Ｉのグループでの探究活動を筆頭に、生徒同士の学びあいの姿勢が良くなってきている。具体的には、発表が苦手な生徒への生徒同士でのフォローや、TEAMSを活用した授業内外でのやり取りが増えてきており、いい傾向である。
第３学年	① 最高学年としての自覚の育成、高い規範意識に基づいた主体的な行動力の育成 ② 授業・補習・模試の相互連携と発展的な学力の育成、個々の進路実現及び自己実現のサポート	・学年集会、学校行事、ＨＲ活動、部活動等を通して、高い規範意識を持って学校生活が送れるよう、教員間で連携して指導する。 ・生徒一人ひとりの状況を適切に把握し、教科担当や進路指導部と連携して進路希望に応じた学習指導や進路指導を実践する。	・文化祭の舞台発表や体育祭などの学校行事で、率先して主体的に取り組む生徒の姿を見ることができた。また、多くの生徒がクラスの取り組みに協力的に活動することができていた。 ・生徒との面談をする時間がなかなか確保できない状況の中でも、少しの時間でも面談を通じて生徒の進路希望や悩みなど把握するように努めた。保護者会を通じて、保護者の考えを把握しながら、生徒の進路希望の実現に向けて指導した。
総合評価	①キャリア教育を担う科目「産業社会と人間」（１年次）において、コロナ禍で制限されていた地元企業への訪問を実施することができた。 また、生徒の科目選択にあたり、多様な進路に応じてガイダンスや個人面談をきめ細やかに行うことができた。特に３年生では、総合学科での学びを生かした総合型選抜および学校推薦型選抜で、国公立２名をはじめ私大においても合格をいただいた。 ②ＳＮＳの不適切な利用による生徒指導事案が複数件発生した。それにより学業への影響や人間関係トラブルに発展することもあり、対応に追われた。 ③生徒の「人間関係力」の育成を念頭に、特にコロナ禍で縮小傾向にあった文化祭や体育祭などの学校行事を、感染対策を行いつつ実施できた。 また、部活動では各部の現状に応じて生徒の活動を支え、なかには地区大会を突破し上位大会への出場を果たす部活動もあった。 ④スピーチコンテストへ参加したり、外国人生徒のＳＤＧｓ活動団体への参加がテレビで放送されたりと、生徒個々の草の根の活動が行われている。外国人生徒とともに各教科において各国の社会や文化について発表や意見交換をする活動を、さらに広げていきたい。 ⑤安心・安全な教育環境をめざし、新型コロナウイルス感染拡大防止対策では、こまめな状況把握と迅速な対応に努め、大規模な感染拡大を防ぐことができた。 ⑥市町村や地元商工会との連携協定のもと、今年度もいくつもの協力依頼を受けて取り組んだ。特に部活動を通じて地元の祭や行事への参加を活発に行った。次年度以降、産学の連携をより推進していく。 ⑦今年度、新学習指導要領が年次進行で始まり、大学入学共通テストの詳細も順次明らかになってきたことで、それらに対応するためのカリキュラム・マネジメントを推進する必要性を感じた。今年度は課題の把握のための意見交換にとどまるが、分掌主導のもと、各教科はもちろん、学校全般における行事等の在り方も含め、具体的に検討を進めていく方向である。		